

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2022（第6号）

図書館と コミュニティアセット

未来の図書館 研究所

樹村房（発売）

2023

Library and Community Asset

The libraries of the future research, Inc. Annual Report. 2022 (Vol.6)

The libraries of the future research, Inc.

Distributed by Jusunbo

Tokyo, 2023

はじめに

3月16日の東京新聞に、音楽家坂本龍一さんが「目の前の経済的利益のために先人が100年をかけて守り育ててきた貴重な神宮の樹々を犠牲にすべきではありません」と直截な表現で、小池都知事に明治神宮外苑再開発の見直しを求めたという記事が出ていた。すでに、この事業は東京都の「東京2020大会後の神宮外苑地区のまちづくり指針」に基づくものとして、2月16日には施工許可が出され、ウェブサイトには3月に着工と報知されていた。この要望に都知事は記者会見で「事業者にも手紙を送られたほうが良いのでは」と言及し(『東京新聞』2023-03-18)、民間事業の問題だとして、都は当事者ではないかのような口ぶりだった。

神宮外苑は、種々のスポーツ施設や、聖徳記念絵画館、イチヨウ並木などの文化財・自然景観を抱えている。それらを適切に更新・保全し、どのようなまちづくりをしていくかは、たとえ民有地だとしても、多くの人々にとって重大であり、坂本さんは「特に地権者である明治神宮にはぜひとも計画をご再考いただきたい。が、それ以前に都市計画のビジョンのもとに各地の開発の是非が判断される必要がある」とその後も訴え続けた(『共同通信』2023-03-29)。

コミュニティのビジョンやその合意を図るプロセスにおけるこのような議論のきしみは、よく耳にする。わたくしたちの関わる公共図書館でも、昨今同様である。以前は、文化施設と

しての問題であったが、人々の利便性、あるいは図書館の集客効果を踏まえ、まちづくりの拠点に据えるなど、その論点は拡大され、複合的だ。記録された資料を基盤としてコミュニティを育むという図書館の本来的な役割からみれば、このような進展は、実は望ましいともいえる。ただし、わが国では私権が絡む場合、コミュニティの合意を経るのは難しいともいわれ、この種の事案をうまく収束させるには、時間をかけ、積極的に議論をしていかなければいけないだろう。

図書館の活動をよりコミュニティの文脈で考えるために、あるいはきしむ議論をできるならば落ち着かせるべく、昨年 11 月に開催した未来の図書館研究所の第 7 回シンポジウムでは、「図書館とコミュニティアセット」というテーマを設定した。アセットとカタカナ語を用いたのは、会計用語「資産」の範囲にとどまらず、また地域資料だけに限らず、広くコミュニティに価値をもたらすものすべてを視野に入れたと考えたからである。コミュニティを構成する人々がまずアセットであり、またそこに存在する自然・人工環境や、営まれている社会・経済・文化活動などもそうだ。むろん地域の図書館や博物館、あるいは学校などの各種の社会機関は、従来からその象徴である。さまざまなアセットを図書館がとりこみ、あるいはつながり、コミュニティをよりよいものにするための多くの議論が必要である。

本書には、このシンポジウムの内容を収録し、それに四つの論考を収載した。多様な議論が展開されているが、どれもコミュニティアセットにこだわったものである。

シンポジウムの部分は、主催者趣旨説明のあと、二つの発表とその後、参加者を含めたディスカッションである。最初の発表は、都城市立図書館の井上康志さんと藤山由香利さんの「地域の情報とは～図書館とコミュニティアセット～」と題するお話で、図書館の市民による市民のための「プロジェクトスタジオ」が一枚の絵地図をきっかけに「思い出集め」の活動の場となり、「まちなか記憶展」に発展し、そして未来につながる図書館実践の方向を示唆している。

二つ目の発表は、国立歴史民俗博物館の後藤真さんによる「コミュニティアセットとしての歴史・文化、そしてデジタル」である。与論島における古写真アーカイビング・プロジェクトの事例から、資料（情報）が持つ社会的な価値・意味を読み取り、そうした可視化された情報（知）をデジタル技術により構造化し、広く人々が利用できるようにすれば、知を増やしていくことができると唱える。図書館・博物館は、知の収集をするだけではなく、それを社会で循環させ、知の増殖を行うものなのである。

シンポジウム以外の論考は、まずは、豊中市立岡町図書館の青木みどりさんの「『地域の記憶を 地域の記録へ』地域住民と歩む北摂アーカイブスの取組み」である。大阪北部の豊中市、箕面市、吹田市の写真データベースが、どのように構築され、

維持されているかを述べる。地域の人々（地域フォトエディター）を主体に、生活やまちに密着したさまざまな思いや日々の営みを記録するこの事業は、すでに13年も続けられており、貴重なコミュニティアセットとなっている。

コミュニティといっても必ずしも地理的に近接したものばかりでない。関心を同じくする者がインターネットを通じてつながり、資源を共有するクラウドの領域もある。筑波大学図書館情報メディア系の森嶋厚行さんの「クラウドソーシングが不可能を可能にする」は、クラウドにおいて人々があらゆる資源を共有する機会を見つけ、さらに人だけでなくコンピューティングの介在により、課題を解決できるという今後の方向を示す。図書館や防災訓練の事例などがあげられており、コミュニティアセットの新たな展開が望まれる。

山本作兵衛の炭坑記録画・記録文書は、ユネスコの「世界の記憶」にも登録された極めて貴重な地域の文化資産である。「永末十四雄の仕事 ―地域の記憶と記録を未来に残した図書館人」と題して、作兵衛にこれを描かせた図書館人を当研究所の磯部ゆき江さんが探った。あまり知られていない永末と作兵衛との関係とともに、主著『日本公共図書館の形成』にみられる、細部が全体を構成するという地域からの視点、あるいは地域史研究を踏まえた図書館活動の実践と公共図書館史の研究を通じて、あるべき公共図書館像を永末は追究したという。

最後に、国文学研究資料館の増井ゆう子さんによる「コミュニティアセットとしての古典籍」である。わが国は、『国書総目録』とそれを継承する『国書データベース』のおかげで、世界

的にもこの領域は高い水準にあるが、なお古い地域資料等で、『国書総目録』未収のものに遭遇することがある。そこで、現在でも行われている目録類の刊行やさまざまなプロジェクトについての紹介とともに、共有できるデータの作成要領などについて取りまとめてもらった。

本書は、「未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 第6号」であるとともに、前号と同様に、主要なテーマを設定した書籍『図書館とコミュニティアセット』として刊行する。また引き続き、多くの方々に求めやすいよう、株式会社樹村房に発売を引き受けていただいた。

今後とも、本シリーズを充実させていけるよう、さまざまなご意見を忌憚なく本研究所に寄せていただくと幸いである。皆さまの変わらないご支援、ご鞭撻をお願いしたい。

2023 年 4 月

未来の図書館 研究所
所長 永田 治樹

目次

はじめに	3
■ 図書館とコミュニティアセット	11
シンポジウムテーマの趣旨	15
コミュニティ（地域社会）をこちよいものに／公共図書館の 役割：ユネスコ公共図書館宣言 2022／図書館とコミュニティ ／アセットベースのコミュニティ開発	
講演「地域の情報とは～図書館とコミュニティ アセット～」	24
ことのはじまり～一枚の地図との出会い～／コロナで生まれ た時間／アルツハイマー型都市～その対処法～／コロナ禍の ときのいろいろなアイデア／思い出を集める活動／「まちな か記憶展」開催／地域の人は地域のことにすごく関心がある ／引き継がれていく記憶／「図書館は『想い』をつないでいき ます」／取組みから経験した気づき／未来につなげていく実 践活動／プロジェクトの現況	
講演「コミュニティアセットとしての歴史・文 化、そしてデジタル」	52
コミュニティアセットって何だろう／歴史や文化はなぜ重要 なのか／与論の古写真アーカイブプロジェクト／古写真の調 査収集／写真を公開するための権利処理／現地展示と Web 展 示／写真で残された与論の風景の歴史的意味／資産は単体で は存在しない／デジタルで知を構造化してつなぐ／総合資料 学情報基盤システム khirin について／地域の過去を文化資産 にする試み／知を増やしていく循環／アセットを増やすため のデジタル活用／価値を見いだす	

ディスカッション 78

質問 1／歴史や文化に根づく、多様性を確保したまちづくり
 ／共通の記憶を持っていることが結合力や暮らす力になる
 ／図書館の価値をあげるにはどうしたらいいか／質問 2／
 質問 3／コミュニティセットと人々の記憶を未来につな
 げること／デジタル化の価値とタイミング／デジタル化は
 地域情報が集まるきっかけになった／地域の人々と今の歴
 史をアーカイブすることは新しい歴史学／シンポジウムを
 振り返って／過去を振り返って未来が見えてくる／人の記
 憶の温度感を共有する／多様なものを多様と認め合うデジ
 タル社会／【追記】・質問 4

■ 「地域の記憶を 地域の記録へ」地域住民と歩む 103

北摂アーカイブスの取組み 青木 みどり

1. はじめに 104
2. 北摂アーカイブスを立ち上げた経緯 106
3. 北摂アーカイブス始動 110
4. 現在の活動 112
5. 公開写真データ件数とアクセス件数の推移 117
6. まとめ 一枚の写真から繋がるひとと地域 120

■ クラウドソーシングが不可能を可能にする 125

～ライドシェアから図書館まで～ … 森嶋 厚行

1. はじめに 126
2. クラウドソーシングとは 127
3. 図書館とクラウドソーシング 140
4. 情報源としての人間 148
5. 情報源としての群衆 154
6. データベースとクラウドソーシング、そして AI 156
7. まとめ 163

■ 永末十四雄の仕事 ―地域の記憶と記録を未来に残した図書館人	磯部 ゆき江	171
1. はじめに		172
2. 地域の記録を未来に残す ―山本作兵衛と永末十四雄		173
3. 公共図書館史研究		179
4. 筑豊社会・石炭産業史		191
5. おわりに		195
■ コミュニティアセットとしての古典籍	増井 ゆう子	201
1. はじめに		202
2. コミュニティアセットとして考える古典籍		202
3. 古典籍とは何か		203
4. 古典籍書誌作成の現在		204
5. 地域に存在する古典籍		205
6. 地域の古典籍の目録等の作成		208
7. 国文学研究資料館の書誌作成		214
8. おわりに		217
あとがき		221

図書館とコミュニティアセット

開催日 2022 年 11 月 28 日（月）

会 場 都城市立図書館ホール

Zoom および YouTube によるオンライン開催

講演者・パネリスト 井上 康志
藤山 由香利
後藤 真

コーディネーター 永田 治樹

主 催 株式会社 未来の図書館 研究所

■ 登壇者プロフィール

井上 康志（いのうえ・やすし）氏 / 都城市立図書館 館長

1973 年日本大学理工学部卒業後、民間企業を経て 1981 年宮崎県庁入庁。都市計画課などに勤務し 2014 年退職。その後民間企業を経て 2018 年より現職。NPO 法人みやぎ技術士の会理事長、一般社団法人こと・デザイン研究所代表理事。専門は都市および地域計画。県庁在職中に日向市駅周辺のまちづくりに携わり、市民一人ひとりが愛着や誇りに感じる景観デザインを手掛ける。2009 年に共著『新・日向市駅』出版。



藤山 由香利（ふじやま・ゆかり）氏 / 都城市立図書館

三股町立図書館、宮崎市立図書館を経て現職。日本図書館協会認定司書 1143 号。研究分野は情報リテラシー支援・情報ニーズ・地域資料。『認定司書論文のたまてばこ』（郵研社、2019）、『地域資料サービスの展開』（日本図書館協会、2021）にそれぞれ寄稿。最近の趣味は、近所を散歩すること。



後藤 真（ごとう・まこと）氏 / 国立歴史民俗博物館 准教授

2007 年大阪市立大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。人間文化研究機構国立歴史民俗博物館准教授，総合研究大学院大学准教授（併任）。2021 年，科学技術・学術政策研究所「ナイスステップな研究者 2021」に選定。専門は人文情報学・歴史情報学。特に地域歴史資料の大規模データインフラ作成と，それを用いた地域における文化継承の研究を行う。著書に『歴史情報学の教科書』（文学通信）など。



永田 治樹（ながた・はるき） / 未来の図書館 研究所 所長

名古屋大学附属図書館を振り出しに，国文学研究資料館，東京大学・金沢大学・北海道大学の図書館などに勤務後，1994 年から筑波大学図書館情報メディア研究科，立教大学文学部等で教育・研究に携わる。専門領域は図書館経営。近著に『公共図書館を育てる』（青弓社，2022）。



＜シンポジウム記録の構成にあたって＞

「図書館とコミュニティアセット」をテーマに開催された、未来の図書館研究所第 7 回シンポジウムの記録を次の構成により所収した。

1. 講演の中に、シンポジウムで配付された資料に基づき、見出しを挿入した。
2. 講演でパワーポイントや Web サイトの図に言及している部分については、当日のパワーポイントのスライドの一部を抜粋し掲載した。
3. 挨拶や進行に関わる部分、ディスカッションの一部は割愛した。
4. 当日取り上げられなかった質問とその回答を追記として収録し、末尾に注・参考文献を付した

シンポジウムテーマの趣旨

永田 治樹（未来の図書館 研究所 所長）

2016年10月に「図書館のゆくえ」というテーマで、このシンポジウムを始めまして、おかげさまで、今回で第7回を迎えます。第1回を除き、テーマにカタカナ用語を使う妙なシンポジウムというご指摘もあるのですが、別に奇をてらうつもりはなく、真意は「少し視点を変え、改めて図書館のことを考えてみよう」という趣旨であります。

今回も一昨年、昨年と続いて、ZoomとYouTubeによるリモート・シンポジウムとなっております。ただし今回は都城市立図書館のご尽力で、久しぶりに登壇者の方々、ここに立ち会ってくださっている方々と向き合える態勢となっております。また、こちらのスタッフと設備のおかげで、会場の雰囲気が通常のZoomよりリアルにご覧いただけるようになっています。このシンポジウムが今後もこのように、臨場でも、そして場所を問わない遠隔地からも参加できるハイブリッドな形式で引き継がれていくことを願いつつ、本日のシンポジウム開会の挨拶に代えさせていただきます。

さて、タイトルページのスライドの写真を説明いたします（図1）。こちらは私がこの夏訪れたオランダのデン・ヘルダーという町の「学校7（School 7）」という図書館です。この町はオランダ海軍の基地があったため、第二次世界大戦中、ドイ

ツ軍によって完膚なきまでに破壊され、町がほぼ消えてなくなりました。ただ、この学校の建物の骨組みだけが残りました。あまり言及したくない例えですが、原爆ドームとか、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム教会、そんなものを思い出します。戦後、町は長い時間をかけて復興し、以前とはまったく違った光景になってしまいましたが、図書館をこの学校の跡地に建設するにあたって、学校の遺構を活用し、教室などを復元し、活用することになりました。残っている骨組みや壁を活用するほうが、経済的にも有利だったということもありました。2016年の図書館の開館によって、皆が通った学校という共有できる記憶がよみがえりました。



図1 スライド「タイトルページ」

この窓の外は新しい街並みです。一幅の絵のように見えます。また、椅子の前には絨毯が敷かれています。その柄はこの街の

戦前の光景を織り込んだものです。こうした共有できる記憶はコミュニティアセット、すなわち地域社会の資産です。それを活かした学校 7 という名の図書館はコミュニティをつないでいます。今回のシンポジウムのテーマは、図書館とこの「コミュニティアセット」です。

コミュニティ（地域社会）をこちよいものに

次のスライドはコミュニティアセットとは何か、具体的にどんなものがあるかを描いた見取り図です（図2）。

コミュニティアセットの中心は、まずコミュニティの住民です。人々はそれぞれの技能や力量でコミュニティを発展させていく基盤です。次いで、コミュニティに不可欠な役割を果たす学校、病院、図書館、博物館などの社会的な機関があります。



図2 スライド「コミュニティ（地域社会）をこちよいものに」

また人々が経済活動を行うための、あるいはその成果としての経済的資産もあります。そして先ほど述べたようなコミュニティで共有されている記憶、歴史、人々が集う場所、クラブ、あるいはボランティアグループがあるでしょう。さらにコミュニティを維持するための公共交通、上下水道などもそうです。これらがコミュニティの生活を営んでいくための私たちを支えるアセット、資産です。それらがうまくかみ合い、それぞれの役割を果たしていれば、こちよいコミュニティを維持できましょう。

公共図書館の役割：ユネスコ公共図書館宣言 2022

図書館は、あらゆる種類の知識や情報を入手できるようにする情報センターというコミュニティアセットです。画面(図3)に引用した文言は「ユネスコ公共図書館宣言」の文言なんです、それが2022年7月に四半世紀ぶりに改訂されまして、次の二つの要素が加わっています。

知識社会という状況認識が新しく示されました。それに応じた、増大する情報・知識を提供するだけでなく、新たな知識を創造するしかけが必要で、人々が協働できる公共スペースの提供も重要だということもいっています。それから二つ目は、図書館が地域社会を育むということを明言し、人々の生活を紡いでいくものだといっています。

要は、今日の公共図書館は単純に読書や情報提供のためだけではなくて、人々をつなぎ、知識を増やし、そして地域社会を育むという役割を果たすものだと主張しています。

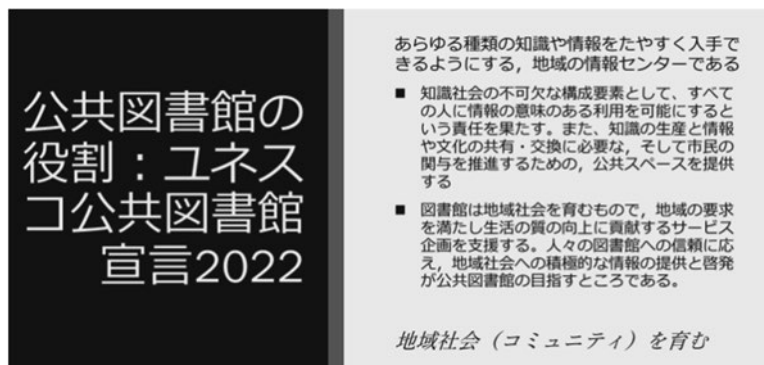


図3 スライド「公共図書館の役割：ユネスコ公共図書館宣言 2022」

図書館とコミュニティ

図書館が地域社会における資産（コミュニティアセット）であることは、皆さまにはあえて説明する必要もないでしょう。ただ、このユネスコの宣言で強調された、「図書館は地域社会を育むもの」という指摘には、現状からみますと、そこまでやるの、できるのという感があるかもしれません。

実はこのことを、私に改めて確認させてくれたのは、米国の博物館・図書館サービス機構（Institute of Museum and Library Services：IMLS）の動きでした。IMLSというのは、1996年に設置された独立行政機関で、助成や調査の事業を通じて、連邦レベルで博物館、図書館をリードする機関です。アメリカ合衆国は州を合わせた国家ですので、教育行政は州単位で行われており、従来連邦レベルでの図書館政策は大変手薄で

した。しかし、社会が急速に情報化しインターネットが進展する過程で、この IMLS が設置されまして、その図書館政策の成果には目を見張るようなものが出てきました。先月（2022 年 10 月）にちくま選書として刊行された豊田恭子さんの『闘う図書館：アメリカのライブラリアンシップ』という本には、IMLS を中心とした米国の図書館事情が記されています。ご興味のある方には一読をおすすめします。

ついでに申し上げておくと、日本とアメリカの公共図書館にはもともとかなり差があったのですが、今ではその差はもっと拡大しています。特に顕著なのは、公共図書館におけるデジタルサービス、そして人々を巻き込む豊富なプログラム（イベント）の展開です。そのようなプログラムサービスに関して、本日の会場、都城市立図書館では充実しておりますが、一般に日本の公共図書館は十分には行われていないようです。

その IMLS が 2016 年に「コミュニティ触発イニシャティブ（Community Catalyst Initiative）」というものを始めました。「地域社会触発計画」としてコミュニティアセットを最大限に活かして、地域社会にインパクトを与え、人々の生活の質（ウェルビーイング）を向上させようというものです。時間の関係で縷々に説明できませんが、「参考 1」というスライド（図 4）に、このイニシャティブのねらいをあげておきました。

(参考 1) IMLSの「コミュニティ触発イニシャティブ」のねらい

- 現在のコミュニティ開発とその評価に関わる実践の支援
- 図書館や博物館が、特定の人々（例：退役軍人など）へのより良いサービス提供機会の発見と、利用者中心の設計・連携に基づいたツールの開発
- 図書館や博物館が提供する家庭学習の環境で、地元のSTEM 実践者を最大限に活用して科学の探求を促進する方法の調査研究
- 博物館と図書館が地域社会のウェルビーイング（人々の幸せ、繁栄）にどのように貢献しているかの分析
- 期待される行動、アウトプット、および長期的な成果を確立するための変化の理論の作成



<https://www.imls.gov/our-work/priority-areas/community-catalyst-initiative>

7

図 4 スライド「参考 1」

アセットベースのコミュニティ開発

IMLS のコミュニティアセットによるコミュニティ開発という施策には、基盤になる考え方がありまして、この表(図 5)がそれを提示しています。これまでのコミュニティ開発は、どちらかといえば、左側の「社会活動モデル」に寄っていました。地域にどんな問題があって、なにが足りないかを明らかにし、専門家を中心にした外部からの支援を行う方法でコミュニティを改善しようとしてきました。しかし、援助が終わればその地域はまた元の状態に戻ってしまい、持続的な成長が確保されないことが多かったといいます。それに対して、右側の「コミュニティづくりモデル」が望ましいあり方です。

元の状態に戻ってしまわないよう、地域住民のスキル、地域

団体の力、および地域の社会的機関の機能を強化することが必要です。地域住民のスキル、地域団体の力、地域の社会的機関というのは、コミュニティアセットです。つまり、既存の地域社会資産に基盤をおき、将来に向けてより強力で持続可能なコミュニティを構築する方向を展望するのです。

アセットベースのコミュニティ開発	
地域にあるアセットをベースにして持続可能なコミュニティを築く	
社会活動モデル	コミュニティづくりモデル
「必要なもの」「足りないもの」にフォーカスする	「既にあるもの」にフォーカスする
「問題」を見つけ、その問題を解決しようとする	話し合い、既にあるもの、機会から築き上げる
チャリティ等外部支援指向	投資指向
機関の重視	協会等の重視
個人にフォーカス	コミュニティにフォーカス
目標は、サービスや設備の提供・導入	住民の関与を増やし、地域の力を上げる
資格のある人が中心	住民同士の関係が中心
答えは問題対応にある	答えは地域の人にある
地域の人々は外部エージェントの「お客様」	地域の人々は変革の当事者
https://www.uniteforsight.org/community-development/abcd/module2	

5

図5 スライド「アセットベースのコミュニティ開発」

私どものシンポジウムで、第2回目に「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマを取り上げましたが、その際に参照したものと同様です（バングラデシュの有名なグラミン銀行のような成功例）。地域の人々の力でもってその地域を、よりよいものにしていくということを試みています。だからIMLSも、博物館・図書館がこのような観点でコミュニティを

触発し盛り上げていけるのではないかと考えたようです。

アセットに注目したコミュニティづくりは、多くの方は現在日本の各地で展開されている中心市街地の図書館、「まちづくり」図書館をイメージされるかもしれません。確かにそうした動きと同調するところもあります。しかし、必ずしもそれと同じとはいえません。あるいは別物だといったほうがいいかもしれません。コミュニティづくりとは経済的な側面にとどまるものではなく、人々の心を豊かにし、まずその社会で差別や排除をなくし、皆でコミュニティの繁栄、幸せを確保すること、全部を含んでいます。コミュニティにはにぎわいも必要ではありますが、人が豊かに暮らしていけること、人と人とのつながりをどのように担保するかが重要です。そして、未来にひきついでいく持続可能性が必要です。

図書館がコミュニティアセットをつないで、人々が必要なものを見つけ、そうした動きをリードできればと思います。本日は図書館がさまざまなコミュニティアセットを掘り起こし、目に見える形として、コミュニティをどのように育むかを問題にし、それについてのご議論をいただきたいと存じます。公共図書館という立場と、歴史情報学という二つの立場から、ご発表を用意していただいております、さっそくご講演を賜りたいと思います。

あとがき

まえがきで取り上げた坂本龍一さんが、本書の編集にあたっているうちに、逝ってしまった。神宮外苑再開発に対する彼の言葉は、死の1か月前だった。ご冥福をお祈りするとともに、彼が次世代に託した思いを、関わりをもつコミュニティの一員としてつないでいければよいと思う。

図書館では、「コミュニティ」がさまざまな場面で取り上げられる論点である。常套語といてもいい。今回のシンポジウムでの発言や論考からみえるのは、それぞれコミュニティを見据えていること、そしてその結果、図書館の活動が明らかに高められていることである。逆にそうしていない場合、社会機関でありながらそのサービスが停滞してしまうのも事実だろう。コミュニティ、人々への公平（エクイティ）な目配りは不可欠だ。

末尾ではあるが、お忙しいなかご講演・執筆に協力いただいた、井上康志さん、藤山由香利さん、後藤真さん、青木みどりさん、森嶋厚行さん、磯部ゆき江さん、増井ゆう子さんには、改めて謝意を表したい。また、種々ご尽力をいただいた樹村房の大塚栄一さんに感謝を申し上げたい。

図書館とコミュニティアセット

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2022 (第6号)

ISSN 2433-2151

2023年5月30日 第1版1刷発行

編集 株式会社 未来の図書館 研究所

発行 株式会社 未来の図書館 研究所
113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2階
TEL 03-6673-7287 FAX 03-6772-4395
<https://www.miraitosyokan.jp/>

発売 株式会社 樹村房
112-0002 東京都文京区小石川 5-11-7
TEL 03-3868-7321 FAX 03-6801-5202
<https://www.jusonbo.co.jp/>

印刷 株式会社 丸井工文社

本書の無断転載を禁じます。

Printed in Japan

ISBN978-4-88367-381-0 C3300